

保育の姿勢

私たちは、子どもを観察することから保育を考えます。

日々発達していく子どもの姿を大切に作る姿勢

例えば、おもちゃを持つ動作。

手のひらをおもちゃに押しあてて包むように握り込む時期、5本の指全体で大雑把につかむ時期、指先でつまんで持つ時期へと進みます。

両手で握る、片手でつかむ、握ったおもちゃを反対の手に持ち替えるなど、できる動作が増えていきます。

おもちゃを「どうぞ」と差し出して手渡すこともし始めますが、この動作は簡単ではありません。

5本の指を自分の意思で開いてタイミングよく人の手に移す、物を握る動作より難しくなります。

発達はおとなが前に進めていくのではなくて、動作を繰り返すことで子ども自身が進めます。

大人は環境に目を向けて、転落、誤飲、窒息などに注意を払います。

しかし、全てを危険と捉えるのではなくて、子どもの行動をよく見て、

発達の妨げにならないように月齢に合った経験は大切にしています。

子ども一人ひとりの現状把握から発達を支える姿勢が必要です。

すべての感情を大切に作る姿勢

時には「保育園に行きたくない」と大泣きをする日もあります。

そんな時も泣き止ませようとしないで子どもの気持ちに共感します。

寄り添って、ママの車が見えなくなるまで一緒に見送ります。

少し落ち着きを取り戻すまでは外気に触れています。

お茶を飲むことで体の内側から子どもが自分で気持ちを整え始めるので、そのタイミングを待ちます。

泣いても怒っても大丈夫、その感情は容量を超えてあふれ出た感情だからしっかり出します。

自己コントロールの力はその先にあるので感情の芽生えに蓋をしないで過ごすことが重要です。

本質をみる姿勢

0、1、2歳児のクラス、子どもが机に上がったり椅子に立っていることがあります。

危険が伴うのでそっと近づいて座るように促しますがやめません。

繰り返し声をかけますが叱るものではありません。

先生はクラス全体を手遊びで誘い、正しく机と椅子を使う場面に切り替えます。

みんなが大好きな粘土が準備されて、子どもの目がキラキラと輝いて、椅子に座ることが喜びに変わっていきます。

質の良い保育は、子どもの現状を即座に訂正変更させることではありません。

この時期の子どもの行動の本質を知ることです。

机によじ登る手足の使い方や狭い椅子に立ってバランスをとるおもしろさ、

高いところから見下ろすことにも関心があり、おとなとの関わりも楽しんでいきます。

子どもの体が望む遊びができる環境が必要であることに、おとなが気づいて準備をします。

しっかり受け止めて、必要な訂正、年齢にあった保育、身体の発育の理解、子どもの本質をみる姿勢が重要です。

